

9 ウイルスはひとを選ばない

1 主 題 感染症患者の人権

2 主題・教材について

医学的に見て不正確な知識や思いこみによる過度の危機意識の結果、感染症患者に対する偏見や差別が生まれ、患者、元患者や家族に対する様々な人権問題が生じている。

例えば、HIV感染症は、その感染経路が特定している上、感染力もそれほど強いものではないことから、正しい知識に基づいて通常の日常生活を送る限り、いたずらに感染を恐れる必要はない。また、性行為においては適切な予防を行うことで感染を防ぐことができる。さらに、近時の医学的知識の蓄積と新しい治療薬の開発等によって後天性免疫不全症候群（AIDS）の発症を遅らせたり、症状を緩和させたりすることが可能になってきている。

ハンセン病は、らい菌による感染症であるが、らい菌に感染しただけでは発病する可能性は極めて低く、発病した場合であっても、現在では治療方法が確立している。したがって、ハンセン病患者を隔離する必要性は全くないが、日本では、古くから施設入所を強制する隔離政策が採られてきた経緯があり、「らい予防法の廃止に関する法律」の施行（平成8年）により隔離政策が終了した後も、療養所入所者の多くは、長期間にわたる隔離などによって、家族や親族などとの関係を絶たれ、また、入所者自身の高齢化等により、病気が完治した後も療養所に残らざるを得ないなど、社会復帰が困難な状況にある。

全ての人が、自分らしく生きていくためには、感染症を予防しようとするとともに、感染者や感染症患者に対して、偏見をもたず、差別をしない態度を養うことが必要である。さらに、感染した場合は、相手にうつさない配慮をするとともに、自身の健康の回復や症状の緩和に努めることが必要である。

そこで、この教材を通じて、感染症についての正しい知識を身に付けると同時に、自分を大切にするとともに他の人も大切にしようとする態度と行動力を養いたい。また、世界人権宣言等により示されている普遍的な人権から導かれ、全ての人に平等に保障されるべきである「性に関する権利」（性の健康世界学会採択）について知り、さらには、感染者や感染症患者等に対して、人権を尊重する具体的な向き合い方についての考えを深めさせたい。

- ### 3 ねらい
- ・自ら感染症を予防しようとする態度を養う。
 - ・感染者や感染症患者に対して偏見をもたず、差別しない態度を身に付ける。

4 展開例

過程	主な学習活動	指導上の留意点	備考
導入	感染症に関する人権問題について考えよう。		
	・感染症に関する人権問題について学習することを意識する。	・ハンセン病患者に対する国の隔離政策や周りの人々による元患者や家族への厳しい差別、近年もO157や新型インフルエンザウイルスに関して偏見や差別が生じた事実等を知らせ、誰にもかかわりのある問題であると認識させる。	
展開	感染症について正しく理解しよう。		
	・本文（P.34）を読み、感染症について理解する。	・感染と発症について正しく理解させる。	
開	病原体が、どのように感染するのか、科学的に捉えよう。		
	・図（P.35）を見て、病原体がどのように感染するのかを理解する。	・インフルエンザウイルスの場合、主に飛沫感染と接触感染があることを説明する。 ・HIVの感染経路には、性行為、血液による感染、母子感染などがあり、日本では性行為による感染が最も多いことを説明する。	資料1 資料2

《資料1》 インフルエンザについて

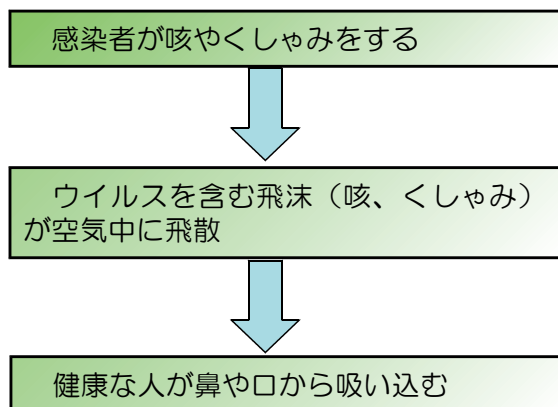
● インフルエンザの感染経路

インフルエンザの感染経路には、飛沫感染と接触感染の2種類があります。

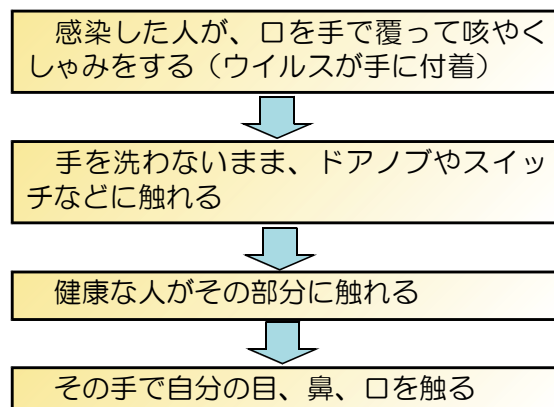
飛沫感染は、感染した人がせきをするなどで飛んだ、飛沫に含まれるウイルスを、別の人が口や鼻から吸い込んでしまい、ウイルスが体内に入り込むことです。

感染した人がせきを手で押さえた後や、鼻水を手でぬぐった後に、ドアノブ、スイッチなどに触れると、その触れた場所にウイルスを含んだ飛沫が付着することがあります。その場所に別の人が手で触れ、さらにその手で鼻、口に再び触れることにより、粘膜などを通じてウイルスが体内に入り感染します。これを接触感染といいます。

① 飛沫感染



② 接触感染



● インフルエンザにかからないために

(1) 流行前のワクチン接種

インフルエンザワクチンは、感染後に発病する可能性を低減させる効果と、インフルエンザにかかった場合の重症化防止に有効と報告されており、日本でもワクチン接種をする人が増加する傾向にあります。ただし、ワクチンの効果が持続する期間は、一般的には5か月ほどです。

(2) 外出後の手洗い等

流水・石鹸による手洗いは手指など体についたインフルエンザウイルスを物理的に除去するために有効な方法であり、インフルエンザに限らず接触感染を感染経路とする感染症対策の基本です。インフルエンザウイルスはアルコールによる消毒でも効果が高いので、アルコール製剤による手指衛生も効果があります。

(3) 適度な湿度の保持

空気が乾燥すると、気道粘膜の防御機能が低下し、インフルエンザにかかりやすくなります。特に乾燥しやすい室内では、加湿器などを使って適切な湿度（50～60%）を保つことも効果的です。

(4) 十分な休養とバランスのとれた栄養摂取

体の抵抗力を高めるために、十分な休養とバランスのとれた栄養摂取を日ごろから心がけましょう。

(5) 人混みや繁華街への外出を控える

インフルエンザが流行してきたら、特に高齢者や基礎疾患のある人、妊婦、疲労気味・睡眠不足の人は、人混みや繁華街への外出を控えましょう。やむを得ず外出して人混みに入る可能性がある場合には、ある程度の飛沫等を防ぐことができる不織布製マスクを着用することは一つの防御策と考えられます。ただし、人混みに入る時間は極力短くしましょう。

※ 不織布製マスクとは

不織布とは「織っていない布」という意味です。繊維あるいは糸等を織ったりせず、熱や化学的な作用によって接着させて布にしたもので、これを用いたマスクを不織布製マスクと言います。

● インフルエンザを広げないために

(1) 飛沫感染対策としての咳エチケットの実施

咳エチケットとは、「咳やくしゃみをするときは、飛沫に病原体を含んでいるかもしれないので、気をつけましょう」ということです。飛沫感染対策ではマスクは重要ですが、感染者がマスクをする方が、感染を抑える効果は高いと言われています。

- ・ 咳やくしゃみが出るときはできるだけマスクをすること
- ・ とっさの咳やくしゃみの際にマスクがない場合は、ティッシュや腕の内側などで口と鼻を覆い、

顔を他の人に向けないこと

- ・ 鼻汁・痰などを含んだティッシュはすぐにゴミ箱に捨て、手のひらで咳やくしゃみを受け止めた時はすぐに手を洗うこと 等

(2) インフルエンザにかかったときに気をつけること

「他の人にうつさない」ことが大事です。同居する他の家族、特に重症になりやすい高齢者などにはなるべく接触しないように心がけ、できるだけ他の家族と離れ静養することが必要です。

- ・ 感染予防のため、部屋の換気を心がけること
- ・ 咳がでるときは、マスクを着用すること
- ・ 家族が患者と接するときには念のためマスクを着用し、世話をした後は、こまめに手を洗うこと
- ・ 熱が下がった後も、2日程度は他の人にうつす可能性があります。熱が下がって症状が治まっても、2日ほど学校に行かないようにし、自宅療養すること

● インフルエンザを治すために

- (1) 具合が悪ければ早めに医療機関を受診しましょう。
- (2) 安静にして、休養をとりましょう。特に、睡眠を十分にとることが大切です。
- (3) 水分を十分に補給しましょう。お茶でもスープでも飲みたいもので結構です。
- (4) 人混みや繁華街への外出を控え、無理をして学校や職場等に行かないようにしましょう。

(参考) 厚生労働省HP

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/kekaku-kansenshou/infuenza/

《資料2》

HIV感染症と後天性免疫不全症候群（AIDS）について

● HIV感染症とAIDS（エイズ）はちがいます

HIV	= Human Immunodeficiency Virus（ヒト免疫不全ウイルス） → ウイルスの名前
AIDS	= Acquired Immunodeficiency Syndrome（後天性免疫不全症候群） → 発症した状態

HIVが血液内に入ると、免疫のしくみの中心であるヘルパーTリンパ球（白血球の一種）などに感染します。

HIVが増殖することによって免疫が破壊され、病気とたたかう抵抗力が徐々に低下していきます。感染後数年は自覚症状がない時期が続きますが、やがて本来なら自分の力でおさえることができる様々な病気にかかるようになります。

このように抵抗力が落ちることで発症する病気のうち、指標となる23疾患のいずれかを発症した場合に、AIDS（発症）と診断されます。HIVに感染していて、未発症の状態は、HIV感染症といえます。

※ 23の指標疾患（例）

ニューモシスティス肺炎、サイトメガロウイルス感染症、悪性リンパ腫、カポジ肉腫など

● 感染経路は？

(1) 性行為による感染

日本国内で圧倒的に多いのが、性行為による感染です。HIVは主に血液や精液、膣分泌液に多く含まれており、性行為中に性器や肛門、口などの粘膜や傷口を通して感染します。他の性感染症と同様、コンドームの正しい使用は、HIV感染を予防する、最も有効な手段です。

(2) 血液を介しての感染

HIVが存在する血液の輸血や、依存性薬物（覚せい剤など）の使用における注射器具の共用などが原因で感染します。日本国内で献血された血液は厳重な検査により最高水準の安全が確保されていますが、HIV感染の可能性を完全には排除できません。

過去に問題となった血液凝固因子製剤については、現在は加熱処理が行われているため感染の心配はありません。

(3) 母子感染

母親がHIVに感染している場合、妊娠中（胎盤を通じて）や出産時（産道で）、また授乳時（母乳を飲んで）に赤ちゃんに感染することがあります。現在の日本では、母親がHIV感染症の治療薬を服用すること、帝王切開で分娩すること、母乳を与えないことなどで、赤ちゃんへの感染を1パーセント以下に抑えることができます。

● こんなことでは感染しません

・ 電車のつり革 ・ お風呂やプール ・ ノミや蚊に刺される ・ せき、くしゃみ	・ 洋式トイレの便座 ・ 日本の医療機関 ・ 理髪店・美容院 ・ 同じ職場や学校で生活する	・ 飲み物を回し飲みする ・ 同じ皿の料理を食べる ・ 握手 ・ 軽いキス
---	--	--

HIVは、人の体内で生き続けることができますが、空気や水中などに出ると感染力をなくします。また、汗や涙、唾液、尿、便などの体液には含まれていません。したがって、日常生活においては性行為以外で感染することはありません。

● HIV感染を予防するには？

(1) 性行為に際して

- ・ 性交、オーラルセックス（口腔性交）の際は、コンドームを必ず、正しく使う。
- ・ 性器具を共用しない。

(2) 血液感染を防ぐために

- ・ 注射器具の共用は絶対にしない。

(3) 母子感染を防ぐために

- ・ 妊娠中の服薬
- ・ 帝王切開による出産
- ・ 人工栄養（粉ミルク）での養育

● HIV感染症／AIDS治療のいま

HIV感染症／AIDSの医療は飛躍的な進歩を続けていますが、今のところ、体内のHIVを完全に取り除く治療法はありません。しかし、抗HIV療法の進歩によって、AIDSを発症する前にHIV感染を知り、適切な治療を継続すれば、感染前と変わらない日常生活を送ることができるようになりました。

HIV感染症の治療では、作用の異なる3剤以上の抗HIV薬を併用して服用します。これをHAART（Highly Active Antiretroviral Therapy：多剤併用療法）、最近では「ART」と呼びます。ARTが導入されたのは1997年ですが、現在は新しい薬が増え、1日1回1錠の服用で済む薬も開発されています。副作用も以前より軽くなり、患者さんへの負担も軽減しています。早期に治療を開始したほうが健康維持にも有利で、治療中は他の人への伝播も少なくなります。

自分のためにも、他の人への感染を防ぐためにも、治療は早期に開始することが大切です。また、薬を飲んだり飲まなかったりして中途半端な服用を続けると、薬の効きにくい薬剤耐性ウイルスが出現する可能性があります。そのため、治療を開始したら、特別な場合を除き、継続する必要があります。

（参考）公益財団法人エイズ予防財団「HIV／エイズの基礎知識」

http://www.jfap.or.jp/enlightenment/pdf/h_kisochishiki.pdf

《資料3》

自尊感情

一般的に自尊感情という言葉は、セルフ・エスティーム（self-esteem）の訳語で、他に「自己肯定感」や「自尊心」とも訳されているものです。

「人権教育の推進についての基本方針」（奈良県教育委員会）の留意点1では、「自分の大切さとともに、他の人の大切さが認められていることを実感できるような環境づくりを、あらゆる教育の場で進めること」と述べています。「自分の大切さ」に気づき、自分を価値ある存在として尊重し、認める気持ちが自尊感情であると言えます。「自分は他者からも認められている」「自分にはこんなに素晴らしいところがある」「不十分なところも含めて自分が大切だ」などと自分自身を認識していることは、自信をもって未来に向かい生きていく原動力になると言っても過言ではありません。もちろん、自分の優位性やすぐれた部分ばかりを誇示して、他者のそれは認めないという「エゴ」や「ひとりよがり」とはまったく別の感情であることは言うまでもありません。

※「16 こんな自分が好きやねん」（本書P.71）も参照してください。